
東方武闘劇 ～ the Fantastic Battle Festival.

キツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方武闘劇 ～ the Fantastic Battle
Festival .

【Nコード】

N5218Q

【作者名】

キツネ

【あらすじ】

衛るために拳を振るい、護るために剣を振るい、守るためにその身すら捧げる。ただ“愛するもの”の為に――。
とりあえずあんまり期待しないでいいです。

OPENING：起動

——幻想郷。

現世の人々の記憶から忘れ去られ、幻となったものが集うといわれる、現実とは隔たれた世界^{そと}。

現世に生きる者が立ち入ることは不可能で、またその逆もしかり。常識が非常識に、非常識が常識となり得てしまう幻想溢れる場所^{ファンタジー}である。

ここでは、今では幻想となってしまった様々な“妖怪”たちが生きている。それは日本のものから西洋のものまで多種多様。ここでは和の色が強いので日本妖怪がほとんどだが。

もちろん妖怪だけでなく、やや少数ながら人間も暮らしている。人間たちは妖怪たちとは別に“人里”にてしっかりと己の住まいを建てている。

残念ながらというか必然というか、人間と妖怪が共存するというのはやはり難しいらしい。全ての生き物は己が本能のままに生きることが第一、それは妖怪も例外ではない。人間を“食らう”ものも多く、その概念も相俟って人間たちも「妖怪は恐ろしいものである」と考えている者がほとんどである。

それに、妖怪同士の間でも力量差というのは存在するもの。弱肉

強食、弱い妖怪は生き残れはしない。すると必然的に強い妖怪だけが生き残ってしまう。このまま放っておけば、幻想郷のパワーバランスはたちまち崩れ去ってしまうだろう。

それらのような問題を解決するために、幻想郷にはその“バランス”等を管理する者たちがいる。

その中の一人間代表に“博麗の巫女”がいる。

幻想郷に起きた様々な異変の解決、誰でも対等に戦えるための“スペルカードルール”の制定、現世と幻想郷を隔てる“博麗大結界”の管理など、幻想郷で暮らす妖怪や人間たちが不満不自由なく快適に過ごせる環境を整えている。

博麗の巫女だけでなく、幻想郷の“賢者”と呼ばれる大妖怪たちも、この平穏が崩れないよう常に幻想郷を見ている。

必要とあらば皆で結集して異変解決にのぞむこともある。種族は違えども、“幻想郷を愛している”ということは同じなのだ。

こうして幻想郷は、たまにいざこざがあれども、変わらぬ日常を保ちつつづけているのだ。

少女は常日頃思う。

「感謝は気持ちが大切だ」というけれど、それを形で表す相応の物品を出すのも必要だ、ということ。

少女の職業は巫女である。

一つの神社に留まり、その神社が奉る神を心から信仰し、それを護るが務め……というのが本来の巫女の一般的なイメージと思われる。

しかし、この巫女はそれに加えて何でも屋的な仕事もしていた。人里に出たときは家内安全云々の清めの札を貼ってあげたり、大事が起きればその解決に赴いたり、幻想郷の平穏が保たれるように動いている。

彼女はそこら辺りの妖怪じゃ比にならないくらいに強い実力を持っていた。博麗の巫女としての運命^{さだめ}か、それとも彼女自身の力なのかどうかはさておき、彼女の強さは妖怪たちの間ではかなり有名だ。

そんな彼女はこれまでに何度も異変を解決してきた。それによって救われた人々も沢山いた。

そうすれば彼等も彼女に大いに感謝するのは必然。彼女も——普段顔には出さないものの——とても嬉しく思う。

しかしながら、巫女といえど人である以上、彼女にだって欲というものは出てくる。それなりの仕事をしたのだから、それ相応の報酬又は褒美を貰ってもいい、貰っても罰は当たらない、と考えるのは決して間違いではない。

なので、せめて神社に参拝しに来るくらいはしてほしい。
少女はそう思っていた。

なのに、

「……何でよ……」

少女はわなわなと震えている。感情を表すとするなら、怒り、悔やみというのがしっくりくるだろうか。

「何でなのよ……!」

少女はとうとう我慢できなくなり、心の内を叫んだ。

「何でお賽銭がこれっぽっちも入ってないのよオーーーーー!」
ッ!」

博麗 霊夢がこうして賽銭箱の前で叫ぶのは、今に始まったことではない。
はつきり言ってしまうと、博麗神社は、というより霊夢は貧乏であつた。

霊夢は幼い頃から、この博麗神社を居として育ってきた。
巫女としての素質が、生まれながらにして持った霊夢のその“霊力”は強力であつた。

その力を自分なりに活かし、彼女はこれまでに幻想郷で起こった様々な“異変”に立ち向かっていった。吸血鬼、幽霊、蓬莱人、神、最強と称される妖怪まで、その他諸々……。沢山の強敵たちと闘った。結果は言うまでもなく、全て勝利。

そんなものだから、妖怪たちの間ではもちろん、人里でも彼女の強さを知らぬ者はいない。

そこまで有名であるならば、では何故誰も彼女を敬ってないのだろうか。いや、敬ってはいるかもだが、どうして賽銭の一つや二つ入れてやらないのだろうか。

その答えを申し上げるとなると、“そういうものだから”としか言いようがなかった。ほかに悪い原因はあるにはあるかもだが。

“博麗神社は、霊夢は貧乏”というイメージはもはや一種のステータスとなってしまうている。

それが完全なる理由というわけではないが、幻想郷ではそれがも^{あたりまえ}う常識となってるのだ。

もし仮に博麗神社の賽銭箱がお金で埋まっていたら、恐らく幻想郷の住人は口を揃えて言うに違いない。

『それは異変だ』と。

そういうわけで（ということでもないが）、霊夢はエブリデイで金欠病であった。

おかげでここ最近ろくな買い物も出来ないため、食事は三食とも近くで採ってきた山菜、もしくはお茶である。

たまに仕事の依頼がきたとしても、大体がお悩み相談レベルの事

なので報酬は期待できず、こうして毎日賽銭箱を覗いても現実はずばである。

その前に賽銭を己の生活費に使うのは巫女としてどうかと思うが……というのは霊夢には愚問である。

（また今日も山菜採りに行かなきゃ、か……）

基本面倒臭がり屋な霊夢はため息を吐きつつ、日々日課としている掃き掃除をすることにした。

「ふう……」

掃除を終えてしばらく、霊夢はいつものようにお茶を啜りながらゆっくりしていた。

こうしてみると、幻想郷の平穏を守っている妖怪すら恐れ戦く最強の巫女とは、到底思えない。

（そろそろ来る頃かしら……）

そう思考する霊夢。待っているわけでもないのに、誰かさんがやって来るタイミングを予想する。

結果、彼女の予想は的中した。

雲一つない綺麗な青空に見える一つの影。

黒い鳥、ではなく“箒に跨がった少女”だ。白いリボンのついた

尖んがり帽子に白黒カラーリングのエプロンドレスのその姿は、さながら魔法使いである。

人が飛ぶということ自体が非常識であるが、この幻想郷においてはそんなことすら当たり前なのである。

魔女っ娘は博麗神社上空近くで急降下し、慣れた動きで華麗に着地した。

そして縁側から神社の中、和室にいる霊夢に一言。

「よつす霊夢。遊びにきたぜ」

「……別にアンタなんて待ってなかったんだけど」

「いいじゃん。暇だから来たんだ」

こういうやり取りも既に日常と化している。「暇だから来た」というのはもはや魔女っ娘——霧雨 魔理沙の口癖みたいなものだ。

魔理沙は見たままの“普通の魔法使い”である。

博麗神社から少し離れた“魔法の森”の中に“霧雨魔法店”という名目で居を構え、日々魔法による怪しい研究を行っている。

好奇心があることによって、興味を持ったものは即刻お持ち帰り。それが他人の所有物であつても構わず持つて行く。そして持つて行った物は死ぬまで返さない。

こんな風にはた迷惑な奴であるが、根は真面目で純情で誰よりも乙女、そしてかなりの努力家なのだ。——彼女が人間ながらにして魔法が使えるようになったのも、その努力あつてのことだろう。

そのことあつてか、魔理沙を知る者たちからは「無茶苦茶だけどどこか憎めない白黒魔女」と評されている。

「とりあえずお茶くれよ」

「ったく……図々しいっいたらありやしないわよ」

なんてイヤミを言いながらも茶を煎れているあたり拒む様子はな
いようだ。

「まあまあ、さっき拾ってきたキノコあげるからさ。椎茸だけだ
け」

「……今回ばかりは本当に感謝するわ」

これで山菜を取りに行かなくてすむと思うと、霊夢は感謝せざる
を得なかった。

「——でさ、ようやくその崖にあった珍しいキノコを取ったんだ
けど、その瞬間身体が大きくなっちゃってさ」

「いやどこの配管工よそれ」

しばらく経っていれば、少女二人はいつもの談笑に入り浸る。内
容は、ここ最近の魔理沙の冒険列伝である。

嬉々として語る魔理沙の話聞きながら、霊夢は「よくやるな」
「またやったのか」「その表現はオーバー過ぎるだろう」「凄いな」
等など心の中で感想を述べていた。

しかし、霊夢は決して魔理沙の話が嘘ではなく、全て本当の話だ
と思っている。

理由は、魔理沙が純粋で努力家であること、語っている時の彼女
の笑顔、この2点で十分だろう。

普段他人に興味を示さない霊夢だって（ほんのちよつとだが）興

味を持つくらいに、魔理沙の話は面白いのだ。

魔理沙のように誰かが尋ねてくれば、その誰かと雑談。
これが博麗の巫女、博麗霊夢の日常である。

——物足りない。

最近、霊夢は心の中でそう思っていた。

日常での暮らしが平穏であるのに越したことはない。だが、ただ毎日同じような平穏であつてもつまらないだろう。

いいことでも悪いことでもいい、異変や何やら“刺激”というのは必要だと思われる。適度な刺激があることで、人生にも面白みが出るというものだ。

面倒臭がり屋な霊夢も、ここ最近適度な“刺激”がないせいで“退屈”に感じていた。今隣りにいる魔理沙もそうであるかもしれない。いや、そうだろう。

今まで異変解決やら色々な事件に手をやかされうんざりしていたと思つたら、ふと何事もない日常に戻つてゐる。そのまま何の邪魔もないまま今に至る。

もしかしたら、異変ばかりのあの頃が日常だったのかもしれない……そう思つてはいけないのに、そう思えてくるまでに退屈に感じている。

——ああ、物足りない。

退屈だ。

（何か事件でも起きないかしら……）

今までの常識じょうしきを覆フすような――。

「……、――！」

「でさあ……、……霊夢？」
「……………」

突然真剣な顔つきになった霊夢に気づき、魔理沙は話を止めた。
霊夢が真面目になったということは、もしかや大事が起きたのではないかというのを、魔理沙は理解していた。

何が起きたんだ？

ありきたりな質問をする前に、霊夢は口を開いた。

「……誰か“結界”を弄ったわ。すぐ元に戻ったけど」

結界とは、幻想郷と外の世界を隔てる“博麗大結界”のことをさす。この結界により、幻想郷の中に入ることは叶わず、逆もしかりとなっている。

「結界が弄られた」ことで考えられることは、何か“幻想入り”した、もしくは幻想郷から外にでていったの2つである。

だが、この時の霊夢と魔理沙の台詞。

「……“紫”だな」

「……“紫”ね」

「またあの“スキマ妖怪”が何か連れてきたな」という意見で一致。幻想入りや外に出るというのは非常に大変な出来事であり、またそれを実行するのも非常に困難である。

だが、この幻想郷にはそれをも簡単に出来てしまう者がいる。それが二人の言う“紫”^{ゆかり}という人物だ。

生粋の幻想郷生まれ育ちである二人は（まだ少女だというのに）多くの経験から「結界の異常」何か（誰か）幻想入り「紫のしわざ」という方程式を完成させていた。

こんな事をしてしまう者はどうかしないといけないようだが、それがどうしようもない。何故なら、件の人物はそれ相応の力を持つ者であるし、何よりも“あの性格”を相手するのが非常に疲れるからだ。——とは少女二人の意見。

結論として放置。「紫なら（いろんな意味で）仕方がない」という感じである。

紫というのがどういった人物であるかは、今はあまり関係ないことなので割愛させていただく。

今重要なのは“何か幻想入りした”ことだ。

紫のことだ、また「面白そうだから」という理由で勝手に引き込んでに違いない。

「……さてと、私はそろそろアリスの家に行くかな」

ちょうどいいキリだと魔理沙は立ち上がり、神社から飛び去ろうと準備をしまった。

途中であわよくば“何がやって来たか探してみよう”とも考えているだろう。

「そう。キノコ、ありがとね」

霊夢も咎めること無く、そのまま箒に跨がって飛んで行く魔理沙を見送った。

再び神社の中に静寂が訪れた。

客人もいなくなった縁側にて、霊夢はまったりと緑茶を啜る。

いや、客人がいなくなったと思いきや、また“客人がやって来ていた”。

「やあやあ霊夢。今日も今日とて一人寂しくお茶かい？」

「……さっき魔理沙が来てたわよ。あんただって年中飲ん兵衛でしょうが」

いつの間にかぐで〜ん、と少女が肘をついて横になっていた。

霊夢は驚きの様子もなく、その少女に皮肉を返す。

突如現れた少女の特徴として左右に一本ずつ、二本の角がはえて

いる。片方にはリボンが結んである。

何故なら彼女——伊吹 萃香は“鬼”であるからだ。

霊夢の言うとおり、萃香は年がら年中飲んでいるほど大の酒好きである。顔は常というほど赤く、歩くのもぎこちないのをよく見かける。が、意識がはつきりしているあたり酒には強い。

そして鬼特有の怪力と、“密と疎を操る程度の能力”を彼女は持っている。神社にひょっこり現れたのも、能力によって“霧状にしていた自分の身体”をここで戻したからだ。

萃香の毎日は風任せ。あっちへふらふらこっちへふらふらと、特にやることもなく漂っている。

だが最近はどうして博麗神社に顔を出している所を多く見かける。きつと、霊夢のことを気に入っているのだろう。

霊夢はよく“変わり者”たちに愛されている。

「で、何か用？」

「別に。来たかったから来たのさ」

「……だろうとは思ったけど」

萃香の台詞も、ついさっきどこかで聞いたような気がするの言わずもがな。

「ところでいいのかい？」

「何がよ」

「結界のことさ。また何か入ってきたんじゃないかな。もしかしたら“人”かもね」

飲ん兵衛だとて、萃香も力ある妖怪。結界の異常に関しては既に風の噂で知っていたようだ。

「……別に。私が得するわけでもないし、人だとしても助ける義理はないわ。妖怪に食われたら、それは運が悪かっただけよ。第一面倒臭いし……」

霊夢の返答はわりと非情なものであった。

他人に興味を示さない霊夢にとつての重要なことは、“自分の損得について”である。自分に得があるならそれに従事し、損だと思えば極力関わらないようにする。それが彼女のモットーというやつだ。

悪い言い方だが、見ず知らずの流れ者を助ける程、霊夢はお人よしではないのだ。

多分、一番の理由は、最後に言った“面倒臭い”からだろうが……。

「……けど」

と、霊夢は持っていた湯呑みを置き、縁側の外に出て立ち上がる。

「正直、ここ最近暇だったし身体も鈍るから、運動がてら散歩も悪くはないわね」

大きく背伸びをしながら気怠そうにそういった。

「アッハッハ！ 霊夢がそんなこと言うなんてねえ、こりゃあ雪でも降るんじゃないかい？」

「失礼ね。私が幻想郷を飛び回ってちゃあ悪いわけ？」

「んにゃ、寧ろそれが正しい光景かもね！」

意外だったのか、霊夢からは聞き慣れない言葉に萃香は大笑いで

ある。

こうして霊夢は“ 退屈凌ぎ ” に散歩（というよりは遊覧飛行）に行くことにした。

萃香はずつと寝そべっているあたり、しばらく神社に居着くようだ。まあ中を漁るとか野暮なこととはしないと思うので、霊夢は気にしないことにする。酒は盗られるかもだが……。

「……………ねえ萃香」

出かける前、低いトーンの声で霊夢は言いかけた。

それを聞いて萃香は真剣な顔つきで押し黙る。

相変わらず寝そべってにやけ面だが、凄まじいほどに眼に力が籠っているのがわかる。

「これから先、この幻想郷を揺るがす程の異変が起こるかもしれないわ……………」

「……………どうしてそう思っただい？」

萃香の質問。しかし、霊夢に対してその質問は愚問であった。

何故なら、霊夢の返答は決まってこうだからだ。

それは、本来ならば不明確、しかし彼女が言うことで100%明確になる答え。

「……………“ 勘よ ” 」

こうして霊夢は、久々の幻想郷観光に赴いて行った。

「……やれやれ」

神社に一人残された少女は、むくりと身体を起こした。

そこには、酒を飲んで赤くなった顔も笑みも、少女の姿もない。

「霊夢の勘は“よく当たるからね”。この先何が起こるかわかったもんじゃないよ」

あるのは、真剣な眼で先を見つめる“鬼”の姿だけだった。

少女たちは、自ら“非日常”へと身を投じる。

新たな“運命”は、遂に回り始めた。

OPENING：起動（後書き）

・博麗霊夢『楽園の巫女』……

これから何かが起こることを予想。一抹の“期待”と“不安”を抱えつつ、散歩に出かける。

・霧雨魔理沙『普通の魔法使い』……

霊夢に食用キノコの土産を置いていく。その後“友人”であるアリスという名の人物の元へ訪問しに行く。

途中、何か面白いことはないかと見渡したが特に何もなかった。

・伊吹萃香『疎密を操る鬼』……

霊夢の“勘”が気にかかり、相談のために“友人”の下を訪ねに行く。

STAGE 1：遭遇

——何だ？

とある森の中、二匹の獣がじゃれあっていた。
いや、そんな穏やかな表現ではない。もっと詳しく言おう。

「グウウウウウ……」

「……………」

幻想郷にある“魔法の森”のある場所で、“人間よりも大きな妖獣と少年が対峙していた”。

——何なんだ？

もし人間が野生の妖怪に出会った時、その人間はどうするだろうか。

まず、戦おうとはしないだろう。非力な人間と強力な妖怪とでは土俵が違うところの話じゃない。妖怪にとって、人間は“食糧”以外の何物でもないからだ。

そうなると残る道は一つ、全力で“逃げる”しかない。

だがその後も絶望的。妖怪も逃げ出した食糧を全力で捕まえに来る。しかも身体能力差もあって、逃げ切るのはもはや運の問題となってくる。

逃げ切れれば運がいい、捕まったらそれまで、ご愁傷様である。

——どうなってるんだ？

しかし、今この場にいる少年は逃げも隠れもせず、戦おうとしている。余程の命知らずなのか、力量も計れない馬鹿なのか。

しかし、彼は命知らずでもなく馬鹿でもない。

何故なら彼には勝算ちからがあつたからだ。

力、というよりは戦闘に関する技術と言った方が正しいかもだが。

——何が起きてるんだ？

まず、基本戦術として受け身のかたちをとる。攻めには回らず、
妖獣^{てき}の出方を見る。

「グウアアアアツ！！」

やがて痺れを切らした妖獣が襲い掛かり、前足にあるその鋭い巨大な爪で一掻き。

だが少年はそれを辛うじて……いや、“完全に間合いを見極めギリギリのところかわす”。

隙が出来たところに少年は俊敏な動きで、妖獣の急所と思われる部分——腹を思い切り蹴る。

「ガアアウツ！？」

利いたのか、悲鳴をあげて身体を硬直させる妖獣。

少年はそのチャンスを見逃さず、守りから一気に攻めに転じる。フロントステップからの左アッパーカット、そのまま回って逆の手の裏拳、更に回って左、右と回し蹴り。

型というにはあまりにも乱れており、どちらかといえば喧嘩に近い攻撃。しかし、その全てが威力ある強力なものだった。

喰らった方はたまったものじゃない。

「グ……ウウウウ……」

ヨロヨロと立ち上がった妖獣には、もはや戦意がなくなっていた。勝てないと悟ったのだろう、持てる力を振り絞ってその場から逃げるように走り去っていった。

——俺は何をしてるんだ？

戦っていた——どちらかといえば“闘”っていたその間にも、少年は混乱していた。

何故いきなり襲われた？ 何故あんな生き物がいるんだ？

そんな疑問よりももっと重要でシンプルな疑問を、少年はずっと頭の中で思っていた。

——何故俺はここにいる！？

——ここは一体どこなんだ！？

「ハア……これで、3体目……」

道龍（タオロン：姓が道で、名が龍）は一息つき、疲れた身体を休ませるため近くにあった大木に背中を預けて腰を下ろした。

「……どうなってやがんだよ、クソ……」

茂った木に覆われ暗くて見えない空に言い放つても、その問いに答えるものはいなかった。

“気がついたらここにいた”。

龍がこの森にいる訳を述べようとしたら、そうとしか言いようがなかった。

彼が次に目を覚ました時には、見ず知らずの薄暗い森の中。常人ならこれだけで混乱ものだが、龍は落ち着いた方であった。

自分でも不思議なくらいに冷静だった。

一体どうしてこうなったのか、とりあえず冷えていた頭で考えようとした直後、また思いもよらないことが起こる。

即ち、妖獣の襲来。

ここまで来れば混乱では済まさない。もはやパニックになってもおかしくはない。

しかし、それでも龍は自我を保っていた。

と同時に、彼は直ぐ目の前のことに意識を集中させた。

間もなく襲い掛かって来た妖獣。本能のままに爪を振るう。

龍はそれをひたすら避け、避けて、避けて、避け続けた。

始めは危なっかしかったものの、そうして次第に避けることに“慣れてしまう”。

“どれくらい間合いをとればギリギリで避けられ、かつ反撃出来るか”を、龍はこの時点で掴んでいたのだ。

その後は言わずもがな、カウンターでキツイ一撃を入れてあげて、その時はおわり。

休む間もなく2体目もやって来たが、これも同じような感じで追い払った。

3体目もすぐにやって来たが、結果は先程のとおり。

結局わけのわからぬまま、龍が身体を休めに入るまでに3回も戦闘が起きてしまった。

（取り敢えず、先ずは今の状況を整理しよう。場所は“薄暗い森”、突然現れた“見たこともない野獣”、そして“俺の実力がどこまで通用するか”だ）

先程のことがあったにもかかわらず、現状把握をしようとするまでに龍は落ち着いていた。

（薄暗い森……ここは見たこともない森だ。俺のいた国では、近くにもこんな場所はなかった。

そして見たこともない野獣……幻ではなく現実だ。実際、さっき触ったしな）

触ったというよりはボコしたの方が正しい、というのはここではどうでもいい。

さて、深い思考はあまり得意じゃない単純な龍は、ここである答えを導き出した。

しかし、その答えはあまりにも非現実的、それを認めてしまうのは今までの自分の常識が覆るのと同じであった。

けれど、この状況を説明でき一番しっくりして納得できる答えでもある。

果たして、龍はその非現実的解答を認めざるを得なかった。

「……“別世界に飛ばされた”ってのか……」

漫画にしかないと思っていたことが、実際自分の身に起きていることを、龍は受け入れることとなった。

（別世界云々はこの際おいておこう。今の状況を打開するのが先だ）
龍は冷静と緊張を崩さない。このような体験に“慣れている”か
のようである。

（次に、これが一番重要なことだが……“俺の実力がどこまで通用
するか”だ）

自分の身を守れるのは自分のみ。
これについては先程の闘いを振り返れば検討がつく。龍の格闘技
術はあの妖獣相手にも十分通用する。

もし相手が別だったとしてもそれなりに対応できるだろう。彼に
はそういう自信があった。

（だが、それは相手が“単体だった時”の話だ。二人以上だったら
……正直最悪だったな）

あの時対等に闘えたのは、あくまでもタイマンの場合だったから
だ。もしあの妖獣が二匹以上で襲い掛かってきたら、かなり厳しか
ったかもしれない。1と2、同じ“数字”でも“意味”は全然違う。
その上息の合ったコンビネーションで来られたら……龍は可能性
を想像し、それに冷や汗を流した。

「やて……」

休憩である程度体力を取り戻したところで、龍は立ち上がる。
青色のパンツについた土を払い、山吹色のジャケットを着直す。
不精気味な黒茶髪を掻き上げて気持ちを切り替えた。

「先ずはこの森を脱出しないとな」

少なくとも森の中はさっきの妖獣だらけで危険だ。

龍は安全性を高めるため、薄暗い森からの脱出を図り歩き出すことにした。

が、

「……！！」

ガサガサ……と、生い茂った草の中から気配がした。それも一つではなく。

「グウウウウ……！」

「ウウウウアア……！」

「ハッハッハッハ……！」

さっきと同じような妖獣。それも三体。

よく見れば、どの妖獣も所々に傷を受けたようなのが見られる。

龍はそれを知っていた。あれは全部自分がつけた傷だ。

「……オイオイ、マジですかあ？」

龍が想像していた“最悪の事態”が起きてしまった。

やって来た妖獣たちは、皆龍が相手をした奴らだった。

それが何の因果か、三匹仲良く集まって帰って来ている。意思疎通がはかれるとしたら、三匹の心はひとつだ。

「リベンジマッチってわけですかい？」

口元が緩む龍であつたが、内心は全く余裕を持っていない。正直、勝てる気がしない。

そこで龍の取った行動は。

「……やるしかねえじゃねーかよ！」

立ち向かう。

逃げるのをやめた。

いや、逃げる気はこれっぽっちもなかった。

もっと言えば、これまでに逃げてもいい状況があつたが、それら全てにおいて逃げることはしなかった。

逃げるのは、背を向けることは、彼にとって嫌なことだからだ。

周りがそれを許しても、自分自身が許さない。

“それ”は――。

「グワアアアッ！！！！」

三匹が同時に、それぞれ別方向から襲い掛かってきた。龍はとっさに構える。が、このあとどうすればいいかわからない。

まさに絶体絶命……と思われたその瞬間。

バシイイイイッ！！

「グギヤアアウエッ！！」

来たかと思つたら、いきなり悲鳴をあげる三匹。身体に電撃が流れ硬直している。

そのままぽてと倒れて気絶した。

「……へ？」

思わず間拔けな声を出してしまう。

倒れた妖獣たちを見てみると、何やら“札”らしきものが貼られていた。

「全く、妖怪とやり合おうとする一般人は初めて見たわ
バカ
え？」

後ろから聞こえた声に、龍は振り向いた。

第一印象としては“赤色の巫女”であつた。
赤色をベースとした“何故か脇の開いた”巫女らしき服、黒くて長い綺麗な髪を束ねりボンで結び、整った顔にある瞳は可愛さ、艶

かしさ、力強さの三拍子が揃っていた。

右手に御祓い棒を持っていることから、やっぱり巫女だと思った。

というかご存知、博麗霊夢の御登場である。

「あんたが……助けてくれたのか？」

「助けられたっていう自覚はあるようね」

霊夢は淡々と喋る。もちろん札（灵力付き）を使ったのは彼女である。

「取り敢えず……私は博麗霊夢。霊夢でいいわ」

「道龍。ミチにリユウって書いて、そう読む。龍って読んでくれ」

「タオロン……中国見たいな名前ね」

（そりゃあ中国出身だからなあ……）

と龍は思ったが、“この世界”に中国があるかどうかも怪しく、下手したら混乱させてしまうかもしれないと黙っておいた。

「それよりもあんた、さっき何しようとしてたの？」

「え？ えーと、まあ……闘おうとしてたけど」

「あんたバカア？ 能力も持たないただの人間が妖怪相手に勝てるわけないでしょ」

霊夢は怪訝な顔で呆れながらいう。

まあ（恐らく）妖怪退治を本職としている彼女から見れば、龍は一般人である。

「でもさっき襲われた時に追っ払えたし……」

「どうやって？ まさか素手でとか言うんじゃないでしょうね？」

龍が本当のことを言っても信じなかった。当然といえば当然なのか。

そうやって話し合っているから、気づけなかった。

妖怪の一匹が、まだ意識があったことに。

今にも龍の背中に飛び掛かろうとしていたことに！

「グワアアアー!!」

「!!」

霊夢が気づいた時には遅かった。

今から攻撃しようにも、札を用意する時間はない。持っている御
被い棒で攻撃しようにも、反応の差は埋められない。

（間に合わない……!!）

襲い掛かれた龍本人は。

「フッ!!」

ガアッ!!

「ガアウッ!？」

“左肘を妖怪の腹に思い切りブチ当てた”！

「破ッ!!」
ドォッ!!

続けざまに右掌を突き出し、妖怪を突き飛ばした！

妖怪は今度こそ、完全に沈黙した。

「……………」

一部始終を目の当たりにした霊夢は、まさに啞然としていた。

「ドジャアア~~~~ン」 ご覧のとおり、なんつって

当の本人はご覧の有様である。

自分の事実と実力を証明すると同時に、冗談を交えて余裕を見せ付けた。

それを見て霊夢は、

「………… 呆れたわ。色々」

ため息を吐くしかなかった。

STAGE 1：遭遇（後書き）

・道龍『森で迷っていた人間』……

いきなり来た見知らぬ土地で右往左往。妖怪に襲われたりするも、持ち前の“実力”で退ける。

霊夢に“助けてもらった”ことよりも“人がいた”ということに安堵する。

・博麗霊夢……

森の中で妖怪に襲われそうになっていた人間、龍を救出。

“自分の利益を考える前に”身体と思考が動いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5218q/>

東方武闘劇 ~ the Fantastic Battle Festival.

2011年10月8日02時34分発行